

令和7年度「1学校1チャレンジ」取組事例集

特別支援学校編

1 重点取組(「2 取組事例」の重点取組は次の①～④のとおり)

- ① 運動やスポーツをすることが好きという児童を育むための取組
- ② 体育の授業が楽しいという児童を育むための授業改善
- ③ 運動領域と保健領域の一層の関連を図るための取組(各教科等との関連を含む)
- ④ 朝食摂取、睡眠時間の確保、スクリーンタイムの増加への対応など、望ましい生活習慣の定着に向けた取組

2 取組事例

NO	学校名	タイトル	重点取組	取組概要
1	荅北支援学校	「僕らもアスリート！競技や補助具の工夫で『できた！』を形に。 ～スポーツを通して主体性を引き出す、荅北支援学校の挑戦～」	①	○小学部・中学部・高等部合同で生活単元学習「スポーツをしよう」

- ・運動やスポーツが好き、やや好き
- ・体育の授業が楽しい、やや楽しい

**「僕らもアスリート！競技や補助具の工夫で『できた！』を形に。～スポーツを通して主体性を引き出す、
 苓北支援学校の挑戦～」**
苓北支援学校

1 自校の現状や課題

本校は重度心身障害児者施設「はまゆう療育園」に隣接する、肢体不自由教育特別支援学校である。小学部から高等部まで12人の児童生徒が在籍しており、その内3人は訪問教育生である。医療的ケアを必要とする児童生徒が過半数を占め、自立活動を主とする教育課程の中で、体調や事故に留意しながら日々の授業を行っている。

体育科・保健体育科の指導については、生活単元学習等の各教科等を合わせた指導の中で取り扱っており、「身体を動かそう」や「スポーツをしよう」といった、体育的指導に重きを置いた単元を学部ごとに設定し実践している。個々の児童生徒に応じて体育科・保健体育科や自立活動の目標は異なるため、教師と対話しながらの学習活動が中心となっている。各学部で設定している、運動を中心とした学習単元も時期が限られており、児童生徒と一緒に身体を動かしたり、学び合ったりする機会が少ないことが課題である。

そのような中でも、毎年6月に実施しているスポーツ競技大会は、全校児童生徒が共に学び合い、力を発揮する場となっている。

2 取組の概要

6月22日（日）のスポーツ競技大会当日に向けて、小学部・中学部・高等部合同で生活単元学習「スポーツをしよう」に取り組んだ。全体競技として「みんなでゴルフ」・「びりびり頂上決戦」の2種目、選択競技として「全力ポッチャ」「苓北万博！こみゃくおとし」「速さを極めろ！苓北スピード！」の3種類の競技を設定した。以下の3種目について、概要や取り組み方を記述する。

全体競技「みんなでゴルフ」では、児童生徒一人ひとりに合わせてゴルフ装置（写真1）を作成し、テーブル上のゴルフコースをより少ない打数でホールアウトすることを競い合った。首の動きでストッパーを外してボールを打ったり（写真2）、腕で紐を引っ張って装置を動かしたり（写真3）と、競技の取り組み方は様々である。ボールを打つ強弱や、方向などを決める際には、自立活動の指導で培ってきたコミュニケーションの方法を生かし、自分の意思を教師に伝えながら取り組んだ。



（写真1）

（写真2）

（写真3）

次に、選択競技「全力ポッチャ」についてである。

ポッチャ用ターゲットを中心に対戦相手と向かい合い、3分間の中で持ち球5球を投げ合い、的に止まったボールの合計得点を競い合うようにルールを工夫した。ランプス上のボールを、脚の曲げ伸ばしで蹴ったり（写真4）、手で押し出して転がしたり（写真5）と、それぞれの児童生徒が得意な方法で取り組んだ。運営上時間制限を設ける必要があったため、じっくり動きを引き出す必要のある児童生徒については、一回の動きで複数のボールが一気に転がるように補助具を工夫した。



（写真4）

（写真5）

最後に、選択競技「苓北万博！こみゃくおとし」についてである。大阪・関西万博のキャラクターに見立てたバランスボールを、得意な方法で台から落とすという内容であり、本競技は対戦形式ではなく、2分間の時間制限の中で「○回落とす」「1分半で落とす」のように個人の目標を達成できるかを競い合った。指の微



（写真6）

（写真7）

（写真8）

細な動きでボールを転がし、それを「こみゃく」に当てることで落としたり（写真6・7）、自分で道具を選択して「こみゃく」の落とし方を工夫しながら取り組んだり（写真8）と、それぞれが学習してきたことを発揮できるように競技を工夫した。

本大会は全ての競技に共通して、保護者やはまゆう療育園生の飛び入り参加ができるようにルールや内容を設定した。また、学校への登校が困難な訪問教育生には、オンラインでの参加ができるように、機器の準備や競技内容の工夫を行った。

3 成果と課題

<成果と課題>

それぞれの児童生徒が得意な動きや、自立活動等で培った力を各競技で発揮することができ、大いに盛り上がる大会となった。また、保護者やはまゆう療育園生からは飛び入り参加ができることが好評で、家族と一緒に競技に取り組んだり（写真9）、卒業生が笑顔で競技に参加したりする姿が多く見られた。学校の取組や児童生徒の日頃の学習の成果を知ってもらえただけではなく、共に競技に取り組むことでスポーツの楽しさを共有することができた。一方で、飛び入り参加用に学校が用意していた補助具や支援具に限りがあり、参加できる園生が制限されてしまった。障がいの程度にかかわらず、誰もが競技に取り組むことができるように工夫することが課題として残った。



(写真9)